

# Learning Sherpa (ラーニング・シェルパ)

HILLOCK Bilingual Kinder School

## Chapter 1 : 背景

### 1. 私たちの子どもの「成長」に対する考え方

- 子どもは一人ひとりが「自ら成長する力」を持っています。また、人は「学ぶ動物」であり、特に幼い子どもは経験するもの全てが学びとなります。
- 子どもがもつ「成長力」「学ぶ力」を信じることから始まります。 (大人が「成長させる」のではなく、子どもが成長するのを大人はサポートする発想で臨みます)
- そして、それらの力が存分に花開くための必要条件は、子どもの発達段階に沿った「適切な環境設定」がなされていることです。

### 2. 私たちの「環境」に対する考え方 (人もまた環境である)

1. 自然とのふれあい
2. 人との深いふれあい
3. バイリンガル環境 (世界の広さを感じる)
4. 先進の学びにふれる

この中で「人とのふれあい」がラーニング・シェルパに関連してきます。それ以外は、環境設定やカリキュラム作りに反映させていきます。



### 3. 私たちの「人とのふれあい」に関するこだわり

- 少人数クラス (⇔ 日本のクラスサイズは大きすぎる)
- ラーニング・シェルパ制度 (⇔ 先生と呼ばない)
- 社会とつながる (家庭や学校以外の人と接点を持つ)

#### 4. 「ラーニング・シェルパ制」が必要な理由

- 私たちの考える教育とは本来「子どもの権利」であり、教育機関とは子どもが「自立と教養を身につける場」です。つまり、子どもが主体で、大人はそのサポートです。
- 現制度（教科・時間割・一斉教育等）の骨格は、約 120 年前の工業化時代に国家戦略の一環として効率的に運営する観点から設計されたものです。
- 未来志向の教育を考える場合、「子どもの主体的な育ち・学び」の視点で再構築する必要があります。
- そこで、HILLOCK では従来の「先生＝教える、生徒＝教わる」関係を超えて、子どもの育ちや学びをガイドする立場の大人であることを明確にするため、「ラーニング・シェルパ」というコンセプトを導入することにしました。

### <教育とは？> 自立と教養を身につけること

#### 「教（える）師」



#### 「教（える）室」

#### 「ラーニング・シェルパ」



#### 「ソダチバ」

子どもの視点で  
教育を再構築

- 都会の環境では、保護者以外の大人と触れる機会が多くありません。ラーニング・シェルパはその貴重な責務を負います。ですが、自然体でつきあっていくことが大切。ただでさえ、子どもにとって隙のない生活です。ゆったり感もとても大切なのです。

#### ーコラム



#### <福沢諭吉の教育論>

欧米を視察し、民間教育をリードした福沢諭吉は政府の教育や学校のあり方に疑問を呈していました。学校は教える場ではなく、個人の資質が伸びるためのツールだと断言しています。実は、教育を子どもの手に取り戻すことは昔からの課題なのです。

#### 「教育」ではなく、「発育」と称すべき

「学校は人に物を教うる所にあらず、ただその天資の発達を妨げずしてよくこれを発育するための具なり。教育の文字はなほだ穩当ならず、よろしくこれを発育と称すべきなり。」

（出所：文明教育論）

## Chapter 2：ラーニング・シェルパとは？

Sherpa とは、ヒマラヤにおける山岳ガイド。豊富な経験・知識をもとに登山者にアドバイスするプロであり、ともに頂点を目指す仲間でもあります。

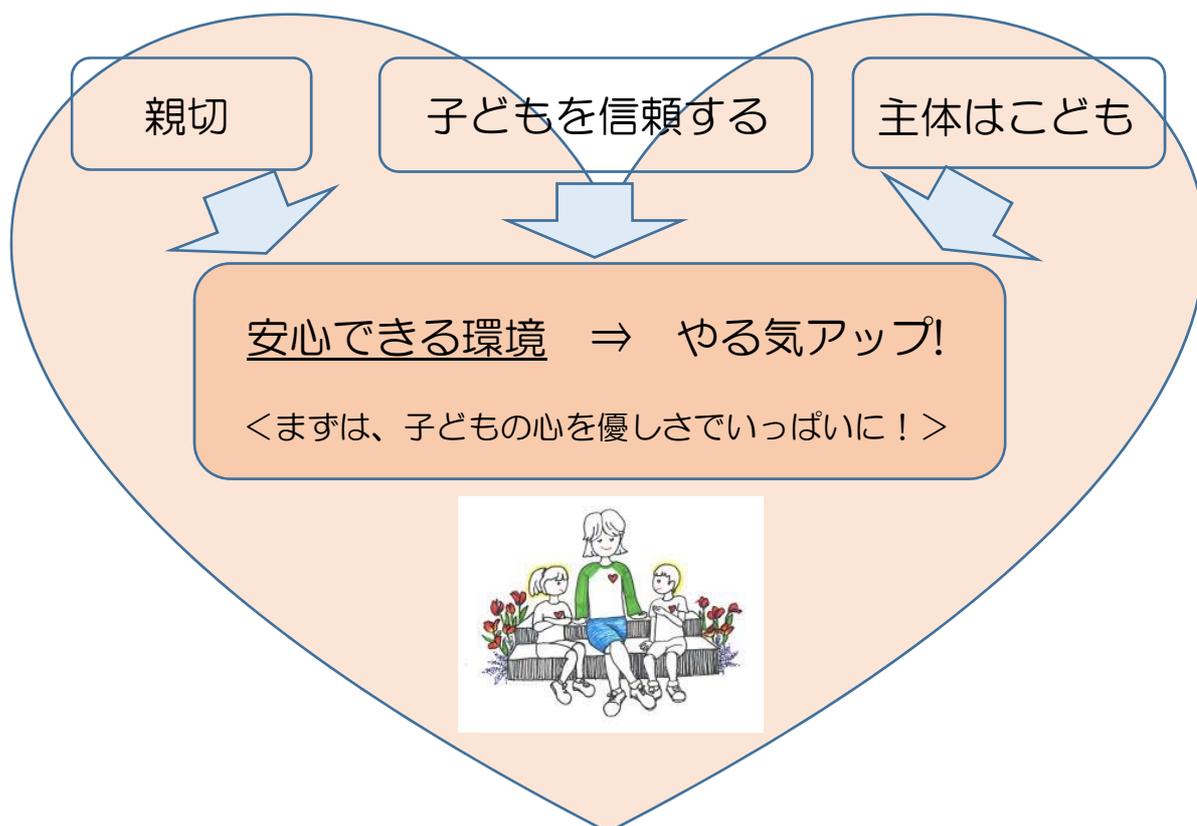
Learning Sherpa は「子どもの育ちや学びをガイドするプロフェッショナル」です。上から目線で教えるのではなく、ともに登り・下りながら育ちあう仲間でもあります。

Learning Sherpa = 子どもの育ちをガイドするプロフェッショナル

1. 子どもを信頼し、理解し、受止めることで信頼を築く（安心）
2. 子どもと目標を共有し、ガイドし、ともに頂上を目指す（育ち）
3. 子どもに世界の広さや新しい景色を見ることを提案する（学び）

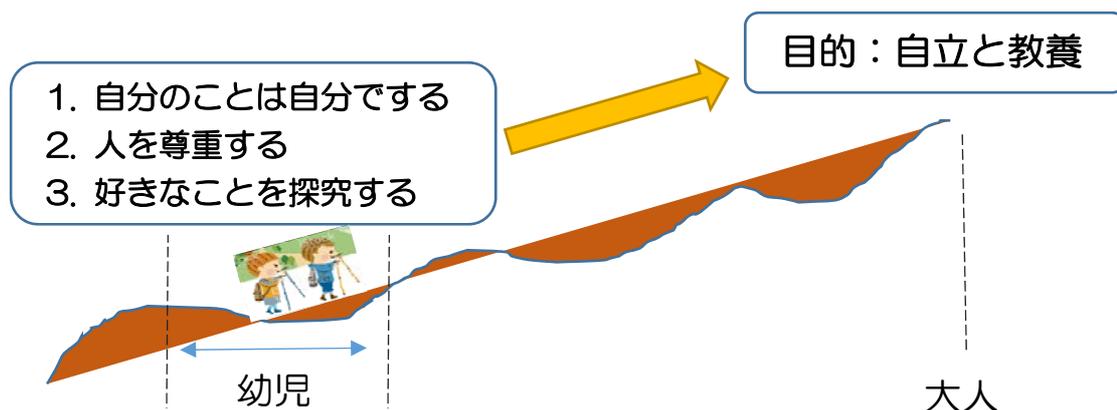
1. シェルパの出発点（迷ったらここに帰って自問自答してみてください）

- 子どもを信頼する（長期的には必ず伸びます。信じて、あせらずに寄り添う）
- 善人で親切（シンプルですがとても大切。言葉とスキンシップを大切に）
- 「主体は子ども」（「登らせる」ではありません。「登り」をサポートするのです）

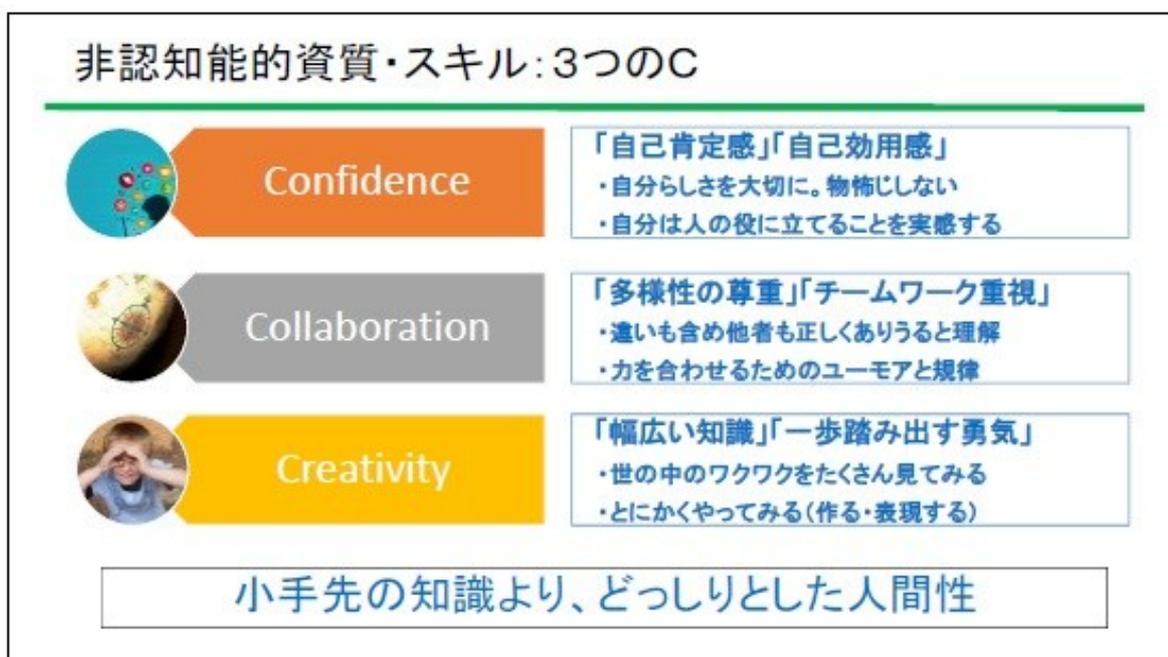


2. ラーニング・シェルパは、どこにむけてガイドするか？

- 教育の長期的目的（例：20歳時点）：子どもが自立と教養をつかみとること
- 自立と教養を遠くに見据えながら、Kinder Schoolでは3～6歳という年齢を踏まえ、以下の方向性でガイドします。（但し、出来不出来を問う話ではありません）



- 幼児期は、人生においてとても大切な非認知的資質・スキルが最も伸びる時期です。私たちは中でも以下の3つに着目していますが、上記方向性とも合致するものです。



- ガイドする際に大切なのは「あせらず、じっくり」です。即席で大人から見た快適な結果を得ようとするのではなく、幼児期3年間をかけてじっくり幹が太くなるサポートをしているのだということを意識しましょう。

### 3. ラーニング・シェルパのイメージ

- 日本の文化では「目上の方が下の足らずを指摘し、正す」のが「教育・指導」という考え方が良く見られます（もちろん、そうでない人もたくさんいらっしゃいます）。
- わたしたちが目指すのは「大人としてサポートし、ガイドする」ことです。
- 「〇〇させる」「□□してあげる」は基本的には NG ワードです。子どもを下に見る人、大人に属するものと考え人、「言うことを聞かせたい」など自分の欲求を満たしたい人、これまでの先生像を演じてみたい人には、シェルパは向いていません。

Leaning Sherpa のイメージは、例えばこんな感じです。

#### 向いているタイプ

子どもの成長力を信頼する人  
ユーモアあふれる人  
学ぶことが好きな人  
好奇心がある、ワクワクしている人

#### 望ましい動き方

子どもをまるごと受け入れる  
提案する  
自然や本物と触れる機会をつくる  
子どもとともに自分も成長する

逆に、良くない例はこんな感じではないでしょうか？

大人から見た「良い子」像に子どもをはめようとする（Confidence に逆行）

「みんなと仲良く」を強要してしまう（Collaboration に逆行）

すぐに正解を教えたくなくなってしまう（Creativity に逆行）



#### ーコラム



#### <ラーニング・シェルパと炭谷俊樹氏>

「ラーニング・シェルパ」制度は、キッズアイランドでの経験、アメリカの幼児教育カリキュラムにベースを置いています。HILLOCK 設立に際して、「ラーニング・グローバルスクール (LG)」の「ナビゲーター制」から多くを学びました（長期研修、オンライン研修など）

元マッキンゼーの炭谷俊樹氏は、1996 年にラーニング・グローバルスクール (LG) を設立、現在は神戸情報大学院大学学長、ビジネス・ブレークスルー大学の講師など多方面で活躍されています。

## Chapter 3 : ラーニング・シェルパの動き方

### ● 登山シェルパの場合

- 山に登る時、どんな登山ガイドだったらいいなと思いますか？「ちゃんと登って下りてくる実力は必要だろうな」「あまり細かいことを言われると委縮しちゃうので大らかな人がいいな」「必要な時には厳しく」「主役はガイドじゃない」とか...
- タイプは違ってても共通して必要となる部分はあるでしょう。想像してみてください。



信頼できる  
Trustworthy



良く知っている  
Knowledgeable



優しい善人  
Kind & Nice

### ● ラーニング・シェルパの動き方～「3つの大ステップ」

- 登山ガイドとラーニング・シェルパでは共通する部分もありますが、異なる部分、もあります。
- ラーニング・シェルパの動き方としては、大きく次の3つのステップをマスターしてください。

#### シェルパの3ステップ

(1) 安心できる関係を作る

(2) ガイド（観察、分析、シェア）

(3) 世界の広さや新しい景色を紹介する



## (1) 安心できる関係を作る

条件なしで受け止める／「あなたの味方だよ！」と伝える



Smile

笑顔



Physical contact

スキンシップ



Caring language

愛のある声かけ

⇒「自己肯定感 (Confidence) & やる気」の素

- 育ちや学びにおいて最も大切なことは、「自分は自分でいいんだ」という自分を（自己肯定感）や安心感が持てることです。
  - 子どもを「条件付きではなしに、まるごと受け止める」ことから始まります。保護者との「愛着関係」につぐ「受け止め力」を発揮できれば最高です。
  - いつでも「あなたの味方だよ」と伝えることで、子どもは安心感を持ちます。この安心感は「自分でやってみる（⇒自立の第一歩）」という積極的な態度、「自分は大丈夫だ」という自信（Confidence）を後押しします。
  - 安心感を作るために効果的なのは、①笑顔、②毎日の7秒ハグ（スキンシップ）、③声掛け、です。他にもあるでしょうから話し合ってみましょう。
  - 安心感を持てるまで、子どもによってどの程度の時間がかかるかは異なりますが、あせらずじっくりと関係を作っていきます。
- 「行為と人格を一体視しない」ことがポイントです。「いい子だから好き」「悪い子はダメ」ではなく、あるがままの子どもをまるごと受け止めます。そのうえで、良い行為には「いいね」、悪い行為には「それはよくない」と伝えることが大切です。
- 他の子どもとの比較は意味をなしません。大人になる過程で、どんな自分でも自分らしさを受け止めて生きていく＝自立する必要があります。ただ、人はいきなりそんなに強くはなれません。まずは「周りの大人に受け止めてもらうこと」から始まります。
- 否定・批判からは何も生まれません。違いを応援することが個性尊重の第一歩です。

## (2)ガイド（観察、分析、シェア）3ステージ

### 1. 見る（Observe）

子どもの動きを観察する



<やること>

- 観察する（定期的に）
- 観察対象は「事実」
- 書き留める（サポートを要求）

<留意点>

- 解釈・評価をしない（ひと呼吸）
- 言いたい気持ちをガマンする

### 2. 考える（Analyze）

事実を分析する



<分析>

- 整理する（共通と相違）
- 推測する（何を考えているのか？/なぜそうするのか？）

<留意点>

- 無理に結論づけない
- トラブルと捉えない

### 3. 接する（Approach）

様々な接し方をする



<やること>

- 話す（動きを描写する、思いを伝える、質問をする）
- 接する（例を見せる、一緒に行く、サポートする、フィードバック）

<留意点>

- 色々な方法を試みる。
- 答えを焦らず、信じて見守る

接し方スキル（話しかけ、ほめ方など）は次のコラムで。

## 接し方のスキル① はなしかける

話しかけの目的は主に2つ、①子どもを良く知る、②言語の発達を促す、です。

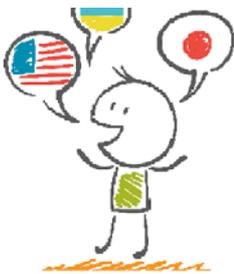
自分のやっていることを描写する	私は今〇〇をしようとしています。
子どものやっていることを描写する	あなたは〇〇をしているのね。
質問をする (Closed question)	この葉っぱは何色ですか？
質問をする (Open-ended question) ～答えの決まっていない質問	この葉っぱについてどう感じますか？… (イメージを広げていくイメージ)
表現を広げる (単語→文章)	「もっとお水！」「水を全部飲んだのね。まだ喉がかわいているのでしょうか。どうぞ」
子どもが話している時はじっくり聞く	かぶせることなく、まず聞きましょう

## 接し方のスキル② ほめる

よく「ほめて育てる」と言いますが、やみくもにほめるのではなく、一工夫。

○ <u>子どもにとって望ましい行為を具体的にほめる</u> 。認知されるので、繰り返すようになります。 なお、望ましい行為とは「自立、人の尊重、探究」などガイド目的にそったものです (大人の都合ではなく)	逆に、ダメな行為にだけ注意をしていると、それが注目を浴びられる行為として認識されるので繰り返すようになります。 また、ただほめているだけだと、ほめられることが目的となって、ほめられないと動けない子どもになります。
○ 「 <u>努力や過程</u> 」を具体的にほめる。努力の尊さをほめることで「やり抜く力」がついていきます	逆に、結果のみをほめることはよくありません。(成績の良しあしではなく、そこへの過程や工夫をほめる方が効果的)

### 一口コラム



#### <第二外国語習得のステージ>

HILLOCK では Bilingual 教育を取り入れています。その習得ステージは以下通りです。

- ① Home Language Use (母国語期)
- ② Nonverbal Period (沈黙期)
- ③ Telegraphic and Formulaic Speech (パターン語)
- ④ Productive Use of Language (豊かな表現)

上記①②のステージでこちらが諦めてしまつては先に進めません。子どものチカラを信じて、粘り強くサポートしていきましょう。

### (3)世界の広さや新しい景色を伝える

- 登山ガイドが「あの山はいいですよ」と伝えるように、ラーニング・シェルパとしては「世の中にはこんなことがあるんですよ」ということを見せたり、伝えたりしましょう。大人として、プロとして腕の見せどころです。
- 自由な環境にしているだけで子どもが勝手に **Creative** になっていくことはありません。まずは、子ども自身が観察する、考える、スキル習得をする、ステップが必要。
- そのためには、シェルパから色々なことを紹介する必要があります。

#### 紹介する (Introduce)

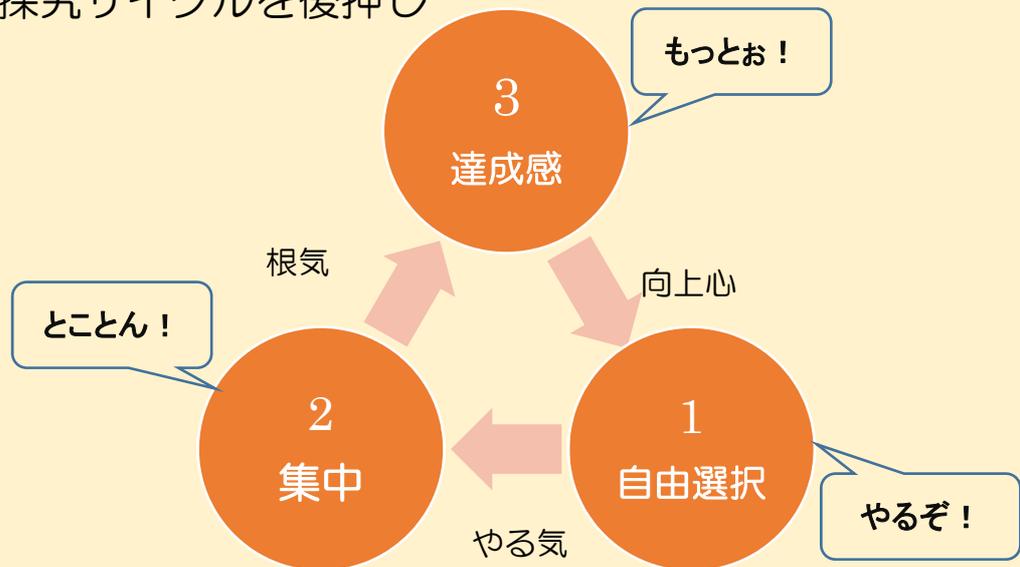
#### 幅広い経験

多くはカリキュラムに組み込まれています。

- アウトドア
- アート&クラフト
- STEM (Science, Technology, Engineering, Math)
- Social & Cultural Studies
- Expression (Music, Movement, Drama)

- 色々な経験をしていると、中にはそれぞれの子どもにとって「やってみたい」という気が起こってきます。ぜひ、励ましていきましょう。

#### 探究サイクルを後押し



## Chapter 4 :

### 1. クラス・ルール

- ルールに関しては「セルフ・ディシプリン（自己規律）」を目指していきます。
- 原則は「自分と友だちの安全と尊厳を守る」です（←「人を尊重する」）
  - 以下については、毅然と冷静に対応します。

1. No hitting (No bullying)
2. No throwing
3. No taking things from your friend.

- 上記以外は自分達でルールを作ったり、変えたりする活動もしていきます。
  - 数は少なく。Big rules と Small rules に分けて。
  - NO をできるだけ使わず、積極的な表現を使う（例：Be kind, Be safe）
- ラーニング・シェルパ側における禁止事項は以下となります。
  - 威圧的な行動（大声を上げる、強制的な行為など）
  - 懲罰的なことはしない（Time-out、無視をするなど）

### 2. 教室内の誘惑

- 教室内というのは一般社会と異なる特殊性があり（閉鎖的で、担任が全権を握っている、大人と子どもで力の差が大きいなど）、そこから独特の誘惑があります。
  - 子どもに「自分の言うことを聞かせたい」「謝らせたい」誘惑。
  - 結果をすぐに求めたい（＝大人が安心して楽になりたい）誘惑。
  - 癒されたい誘惑（確かに癒されますが、それが目的化しては本末転倒）
- そんな時は「ガイドの方向性」を確認してひと呼吸おきましょう。
  - 方向性：①自分のことは自分でする、②人を尊重する、③探究する

#### 一口コラム



#### <すぐに「問題行動」と捉えない>

教育現場によっては、スムーズに運営したいばかりに先生の意に沿わない行動について「問題行動」や「トラブル」と呼ぶ場合も散見されるようです。本当にそうでしょうか？ガイドの3ステップで考えてみます。

観察事実としては「クラスに参加しない。オモチャに夢中」。この時点では評価も働きかけもしません（観察）

なぜそのような行動をするのでしょうか？色々考えられます。①好奇心、②大人の気を引きたい、③その子のペースと合わない等（分析）

仮説に沿って、話しかけてみる、一緒にやろうと誘う、等します（接する）

さて、子どもはどんな反応をするでしょうか？期待通りではないかも。でも、方法は1つではありません。信じて、あきらめず、じつくりと。

一番苦しんでいるのは、上手く表現できない子ども自身かもしれません。

<まとめ> ~手元ですぐ見れるように

ガイドする方向性

1. 自分のことは自分です
2. 人を尊重する
3. 好きなことを探究する

目的：自立と教養



シエルパ3原則：①親切、②子どもを信頼、③主体はこども

シエルパの3ステップ

(1)安心を作る



Smile



Physical contact



Caring language

(2)ガイドの3ステージ



Observe

(評価しない)



Analyze

(なぜを推察)



Approach

(色々な方法を試す)

(3)世界の広さや新しい景色を紹介する (紹介⇒探究)